

有為な書道教員を養成するための教材開発

— 授業実践の成果を踏まえたテキスト作成 —

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
東京学芸大学	加藤泰弘
桜蔭中学校・高等学校	大野幸子
群馬県立高崎工業高等学校	國定貢
千葉県立国府台高等学校	後藤浩
埼玉県立三郷北高等学校	齋藤正夫
千葉県立匝瑳高等学校	鈴木幸子
栃木県立宇都宮中央女子高等学校	五月女章子

目次

0. キーワード	44
1. はじめに —本研究の位置づけ—	44
2. 本研究の役割分担	44
3. 平成29年度の研究を踏まえて	44
4. 授業実践の検討	45
4. 1. 漢字の書 —風趣を考える 孟法師碑と雁塔聖教序— (書道Ⅰ)	45
4. 2. 漢字の書 —行書 風信帖— (書道Ⅰ)	46
4. 3. 漢字の書 篆書のまとめ (書道Ⅱ)	48
4. 4. 漢字の書 —墨跡— (書道Ⅲ)	50
4. 5. 鑑賞から表現へ —書論から考える— (書道Ⅲ)	51
5. 研究を振り返って	52

有為な書道教員を養成するための教材開発

— 授業実践の成果を踏まえたテキスト作成 —

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
東京学芸大学	加藤泰弘
桜蔭中学校・高等学校	大野幸子
群馬県立高崎工業高等学校	國定貢
千葉県立国府台高等学校	後藤浩
埼玉県立三郷北高等学校	齋藤正夫
千葉県立匝瑳高等学校	鈴木幸子
栃木県立宇都宮中央女子高等学校	五月女章子

0. キーワード

書道教育 教員養成 新学習指導要領 資質・能力 主体的・対話的で深い学び 授業改善

1. はじめに —本研究の位置づけ—

書写・書道部会では平成21, 22年度の2年間にわたり「有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発」と題して、主に教育実習生の事前事後指導に活用できるテキスト作成、それを使用した実践および検証を重ねてきた。近年クローズアップされてきている新たな教育課題に対応した書道授業のあり方を共同研究者の議論を重ねることで模索し、次期学習指導要領を見据えた授業実践を行い、検証・考察を加えることで新たなテキスト作成につなげていくことを目的とする活動であった。

本年度においては、同様の試みを新たに重ねるとともに、従前の研究において作成されたテキストの見直しを行った。本紀要においては、さらに検討を進めた授業実践を報告し、年度末には新たなテキストの発行を行う。

2. 本研究の役割分担

本研究は附属学校と大学、そして公立学校および私立学校との共同研究として行った。その方向性と理論構築は荒井と加藤が、新たな授業実践の構想は各共同研究者を中心として共同研究者の助言を踏まえて行い、全体調整は荒井が行った。授業者は詳細な学習指導案を作成、適宜の時期に授業実践を行い、共同研究者を交えて振り返りを行った上で授業改善の方向性を見だし、次期学習指導要領に耐え得る学習指導案となるよう加除訂正を進めている。そして、研究全体を俯瞰しての「研究を振り返って」は、加藤が担当している。

また、本年度においては、大東文化大学大学院文学研究科に在籍する小西優輝、神戸雅史、伊藤正紀の諸君の協力を得たことを付記しておく。

3. 平成29年度の研究を踏まえて

昨年度の研究では、新学習指導要領の告示前ということもあり、「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」を受ける形で、書道Ⅰに焦点を当て、書道授業において育成すべき資質・能力をどう考えるかを中心に議論を進め、授業実践に生かした。今年度はさらに視野を広げ、書道Ⅱおよび書道Ⅲの授業のあり方にも検討を加えることとした。また、表現学習と鑑賞学習のバランスや、その往還的な学習にも昨年同様配慮を行った。そのうち5件の授業について次項で紹介する。

4. 授業実践の検討

4. 1. 漢字の書 一風趣を考える 孟法師碑と雁塔聖教序—（書道Ⅰ）

【授業の要旨】

昨年3月に告示された新学習指導要領では新たな視点が示され、その一つが「風趣」という文言の登場である。現行の学習指導要領では「書の美しさと表現効果を味わい」と示されていた鑑賞の指導項目が、より包括的な文言により示されたものと考えられる。そして、この文言は「作品全体から滲み出る様々な趣や味わい」と解説される。「滲み出る」という言葉からも個人の取り組みでは限界があると感じ、グループやクラス全体での鑑賞活動を通して書の特徴を共有し、それを踏まえて表現を行い、再び鑑賞を通して理解することを試みる。

【資質・能力について】

育成したい「資質・能力」

生涯学習者として芸術に親しんでいくためには、芸術を愛好する心情を育てることが不可欠である。協働しながら書を丁寧に深く観察し、新たな発見や気づきを重ね、関心を高め、意欲や態度に結びつける。また、得られた多くの気づきを体系的に整理し、その情報を活用しながら目的意識を持った表現活動として反映させる。自らの鑑賞眼に自信を持つことができ、表現に生かすことが実感として得られるならば、「課題を発見する力」「科学的なプロセスで問題解決する力」「関係を構築する力、協働する力」等の育成が達成できる。

育成したい「資質・能力」を評価する方法

各自で選択した課題に即したワークシート、レポートおよびパフォーマンス課題としての作品制作によって評価する。パフォーマンス課題は、書の特徴を分析・理解したことを踏まえて表現されていることを求め、作品間の関係性やワークシート等との連動性を重視する。

本時案略案（荒井作成）

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
導入	挨拶をする 二種類の漢字古典（A 孟法師碑とB 雁塔聖教序）の図版を見る 二種類の漢字古典を比較し、深く鑑賞し、表現することで新たな書の見方を探る学習活動であることを知る	挨拶をする 二種類の漢字古典（A 孟法師碑とB 雁塔聖教序）の図版を提示し、よく観察するように促す 複数ものを比較し、検討することでお互いの特徴が際立って見え、新たな発見につながる可能性があることに気付くよう働きかける
展開	各古典の直感的鑑賞によって得られた気づきを各自記録する グループで「玄」「妙」各4枚のカードがAとBのいずれの古典の文字であるかを検討する 各自の気づきを持ち寄り、グループで二種類の漢字古典の共通点と相違点をホワイトボードに書き出す 他の班員の鑑賞の視点について知り、記録する 4枚のホワイトボードを前方に並べ、各班の代表者が簡潔に報告する 他の班の書の見方、考え方の多様性を知り、視野を広げる	どんな些細なことでも構わないので、多くの気づきを書き留めるよう働きかける 字形や用筆など書を構成する要素を観察し、協力して考えることを働きかける お互いが協力して行うよう促す。共通点は黒マジックで、二種類の漢字古典の特徴は赤と青で書き込むよう促す 鑑賞の視点の多様性について考えるように促す 他の班と、自分の班の導き出した事項を比較し、考えるように働きかける 自分の班で出てこなかった意見を書き留めるように促す 様々な視点からの気づきを総括的にまとめるように働きかける

	<p>各班の報告を聞き、要点を各自のワークシートにまとめる (休憩10分)</p> <p>得られた情報を意識しながら、孟法師碑「玄妙」と雁塔聖教序「玄妙」を臨書する</p> <p>二種類の漢字古典の書の特徴が表現できているかどうかを確認する</p> <p>全員の臨書を孟法師碑と雁塔聖教序に分けて掲示する</p> <p>書風の相違により、書の表現性に大きな違いがあることを理解する</p> <p>二種類の漢字古典が同一人物によって書かれたことを知る</p> <p>同一人物であっても、年代を隔てることで表現性に大きな違いが出ることに気付く</p> <p>書かれた順序や年齢、時期の隔たりなどを想像する</p> <p>書の表現性を踏まえて、書かれた順序やその変遷についての根拠を考える</p> <p>孟法師碑は先人によって「古」をいう用語で評価されていることをその理由とともに知る</p> <p>対して雁塔聖教序に当てはまるであろう漢字一字を考える</p> <p>考えた漢字一字を発表する</p> <p>先人によって雁塔聖教序は「媚」という一字で評価されていることを知る</p> <p>自分で考えた漢字一字と「媚」との相違について考える</p>	<p>特に、相違点や各々の特徴を意識して臨書するように働きかける (休憩10分)</p> <p>古典の特徴を意識して書くことができたかどうかを確認するように促す</p> <p>孟法師碑と雁塔聖教序の古典の特徴を確認して掲示するように促す</p> <p>二種類の漢字古典の書の表現性の相違を観察するように促す</p> <p>褚遂良という初唐を代表する人物によって書かれたことを説明する</p> <p>書風が年代を減ることで変遷する可能性について考えるように働きかける</p> <p>書風の変遷がどのように起こるのかを考えるように促す</p> <p>二種類の漢字古典の順序性についてその根拠を考えるように働きかける</p> <p>書論という形で、先人の書に対する考え方が蓄積されていることを理解するように促す</p> <p>雁塔聖教序の書風を理解し、その書風に当てはまる漢字を考えるように働きかける</p> <p>思いついた漢字をその根拠とともに発表するように促す</p> <p>「媚」という文字には「媚を売る」といったネガティブな意味だけではなく「風光明媚」に使われるような「あでやかで美しい」という意味もあることを理解するように働きかける</p>
<p>終局</p>	<p>本時の学習の振り返りとして、同一書者による書風の変化と、先人の評価について感じることを200字程度でまとめる</p> <p>書風や風趣について深く考え、感得することができたことを実感する</p> <p>挨拶をする</p>	<p>「古」と「媚」の文字を用いて振り返りを行い、新たな気づきを書き込むように働きかける</p> <p>クラスの全員で書の特徴を考え、それを踏まえて臨書を行うことで表現に幅ができたことを実感するように促す</p> <p>挨拶をする</p>

【考察】

二種類の古典を効果的に取り扱うことで、生徒の鑑賞眼に訴えかけている点が着目される。個の学習からグループの学習、そしてクラス全体で共通理解を得ようというように授業形態を変化させて、生徒が主体的・対話的に活動できるように配慮した点も見逃せない。ただし、46歳という若書きの孟法師碑を11年後に書かれた雁塔聖教序より上位に感じた生徒も存在した。つまり、雁塔聖教序の良さが生徒の鑑賞活動や書論から導き出した「媚」という評語では感得できていない点は今後の課題と考えられる。

4. 2. 漢字の書 一行書 風信帖 (書道 I)

【授業の要旨】

「深い学び」を目指した臨書学習—籠字を生かし臨書をすることで、用筆や書風を主体的に学び、相互評価を行い意見交換しながら課題を解決することで、対話的な学びが実現し、自らの考えを広げ深めることにつながる授業。

【資質・能力について】

育成したい「資質・能力」

風信帖のよさや美しさを感じ、風信帖を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉える能力。
また想像力や感性を働かせながら自らの思いや意図に基づいて構想し、表現を工夫する力。

育成したい「資質・能力」を評価する方法

「パフォーマンス評価」を用い臨書作品や相互批評での問題解決の様子を、「ルーブリック評価」を用いて行動観察の様子を評価する。また、書道用語、知識等をまとめたワークシートはファイル等に集積し「ポートフォリオ評価」をする。

本時案略案（五月女作成）

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・黙想しあいさつをする。 ・前時の学習内容を想起する。 ・本時の学習内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用具用材が整っているか確認する。 ・簡単な質問をし、前時の内容を確認する。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・「風信帖」作品を教科書の折り込みを開き全文を鑑賞する。内容、背景等を知る。 ・風信帖の美を、王羲之・顔真卿それぞれの美と比較しながら鑑賞する。 ・個人の分析を基に「風信」の臨書をする。 ・双鉤填墨で「風信」部分の籠字をとる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・風信帖の成立に関わる背景、最澄との手紙のやりとり等を紹介し、興味を持たせる。 ・王羲之や顔真卿らしさが感じられる文字を根拠と共にあげさせ、その意見を共有する。 ・自分の分析を基に筆遣いや形に留意しながら臨書させる。（捨てずに①と書いて保管させる） ・半紙大に拡大した「風信」のプリントを用意し籠字をとらせる。
10分	<ul style="list-style-type: none"> ・籠字を塗りつぶすのではなく、実際の筆遣いを用いて空白を埋めながら、角度や太さに注意しながら書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外形から本来の筆遣いを考察しながら書かせる。特に入筆の角度や収筆の形などに注意させる。決して塗りつぶすのではなく運筆によって空白を埋めさせる。
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは各自でどのような筆遣いになっているのかを考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・籠字からはみ出たり、埋まらなかったりした箇所はより注意させる。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・次にグループになり各自の分析をグループ内で発表し、意見交換をする。 ・入筆の角度や太細などの細かい部分の筆遣いも考察する。 ・出されたそれぞれの意見（共通点や相違点）を基に更に考察を深める。籠字から、どのような筆遣いで書かれているかを試し書きなどをしながら検証し、意見の共有をして発想を広げていく。 ・話合いの結果を籠字プリントにまとめる。（筆の動きがわかるように、言葉や図で） ・グループ内で結論に至ったら互いに筆遣いを確認しながら臨書作品を制作する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他人の分析に耳を傾け話合いに積極的に参加するよう促す。 ・机間指導をして、どのような話合いが行われているかを把握する。 ・実際に筆を執り、書きながら考えを深めていくように促す。 ・いい意見があれば適宜全体にも共有させる。
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・考察を基に筆遣いを意識して臨書する。 ・課題をふまえ練習する。 ・相互批評を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・起筆や収筆、字形を捉えよく見て臨書するように促す。 ・適宜机間指導を行う。 ・隣の人と作品を交換し、相互批評を行わせる。互いによい点、改善点を指摘させる。
10分	<ul style="list-style-type: none"> ・他の人からの批評を参考にしながら各自の課題を再確認する。 ・再確認した課題を意識し練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・適宜机間指導を行い各々にアドバイスをする。

5分	・まとめ書きする。 ・グループでプリントに感想をまとめる。	・各自の課題、筆遣いを意識しながら臨書するよう促す。
5分	・まとめ書き作品を提出し、本字の学習を振り返る。 ・片付けをする。	・筆遣いを意識し、自ら考えながら臨書できたかを確認する。

【考察】

古典を細かく観察することで、書に親しみを持ち、新たな課題を発見し、学習意欲を高めている点が着目される。グループで意見をまとめたり、相互批評を取り入れたりすると主体的・対話的な授業を目指している。多少温度差の出やすいグループでの活動をいかに全体に反映させていくかが今後の課題として挙げられた。

4. 3. 漢字の書 篆書のまとめ（書道Ⅱ）

【授業の要旨】

篆書の文字構造や書道史上の位置付けを理解して古代文字の魅力や再認識し、書の世界の広がりを感じることを目指す。古代文字の魅力を現代に生かした書作品を鑑賞し、紙が存在しなかった篆書の時代において、文字がどのように残されたのかを考え、文字が残された目的や素材・媒体と文字の姿態との関連、表現の変遷を考えていく。また、篆刻の実習での学習成果を瓦当の造形美に応用し、古代文字としての篆書の美の理解を深める。

【資質・能力について】

育成したい「資質・能力」

芸術科書道では、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるとともに、表現と鑑賞の能力を伸ばし、書の伝統と文化を理解することを目標とする。そのため、鑑賞学習において古代の中国における漢字の発生に思いを馳せるとともに、古代と現代をつなぐことで、生涯にわたり書を愛好する心情を育む。篆刻の実習を中心とした表現学習を通じて文字構造を踏まえた書の伝統と文化を理解していく。さらに古代と現代をつなぐ課題に気づき、書の媒体と表現の関連を考えることで課題解決を図り、篆刻の実習を瓦当の美の理解に生かすことを見通せる力を育成していく。

育成したい「資質・能力」を評価する方法

「書道Ⅱの後半で制作する条幅作品に押印する自用印を制作する」というパフォーマンス課題を設定し、検字、草稿、印稿、布字、刻印、押印、補刀の各過程において記録を取りながら、育てたい「資質・能力」を評価したい。また、古代文字を素材とした現代書の鑑賞文や篆刻で培った篆書の文字構造を瓦当の美に生かしていく表現学習の課題からの評価を試みる。

本時案略案（荒井作成）

	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
導入	挨拶をする 前時までの古代文字及び篆刻の学習を振り返る 篆書の時代がいつなのかを書道史年表を用いて確認する 作品を見て感じたことを発表する 作品を見ての第一印象を記録する	挨拶をする 「前回まで篆刻を行なったが、その活動から篆書の特徴は理解できたか」 「篆刻の前に甲骨文を始め、古代文字について触れたが、いつ頃の時代のものだったか」 現代の書にも、古代文字の魅力を取り入れているものがあることを紹介する スライド①青山杉雨「萬方鮮」 ワークシート①萬方鮮

	<p>紙がいつ頃から使われだしたのかを考える パピルスは中国で発明された紙とは違うものであることを知る 紙は中国で発明され、最古の紙は紀元前2世紀の地図であることを知る</p> <p>楼蘭の残紙などから、紙に書写することは3世紀くらいには行われていたことを知る 楼蘭の位置を地図で確認する 書聖王羲之の時代には紙に書写することが定着していたことに気付く</p>	<p>「我々は今、紙に文字を書いているけれども、紙が使われだしたのはいつ頃だろうか」 エジプト パピルス B.C.3000～1000 紙の定義を確認する スライド②放馬灘紙 「紀元前2世紀のもので、地図が書かれています」 スライド③楼蘭残紙 「この残紙は20世紀の初め、中国西域の楼蘭から発見されました」 スライド④蘭亭序（神龍半印本） 「これは王羲之の書いたものの写しですが、原本は353年に書かれています」</p>
展開 I	<p>篆書の学習のまとめをすることを確認する 甲骨文学習を振り返る</p> <p>甲骨文カードに記されたものが、我々が用いているどの文字に当たるのかを考える 答え合わせをしながら、古代の中国人がその生物の特徴を捉えて文字化していることに気付く 甲骨文には絵画的要素が色濃く残っていることを確認する 多くは横から見ているが「牛」「羊」は前面から見ていることに気付く 甲骨文カードをヒントにして作品を鑑賞する 甲骨文カードのうち3枚が作品の中に隠れていることに気付く</p> <p>第一印象と甲骨文カードを参考にして理解した後での感じ方の相違を記録する</p>	<p>「では、紙のなかった篆書の時代にどのように文字が残されたのかを見てみよう」 甲骨文カードをグループごとに配布する 「これは何かを拓本にとり、拡大したものです」「一体何でしょう」 この10枚のカードはある生物（1つは実在しない）の象形で、何という文字かを意見交換しながら考えるように働きかける 答え合わせをする</p> <p>常用字解資料</p> <p>その文字を眺めていた方向で分類するように促す スライド①青山杉雨「萬方鮮」 ワークシート①萬方鮮 「改めてこの作品を見てどう感じますか」 「この作品には先ほど見た古代文字が3文字使われています 探して見ましょう」 古代文字の媒体について考えるように促す 「では、紙のなかった時代、この甲骨以外にどのようなものに文字が残されていたと思いますか」 以前学習した、金文や石鼓文を想起するように促す 青銅器、石刻以外のものを想像させる ワークシート②前半 ワークシート③ ワークシート②の該当すると思うところに置くように働きかける ヒントを出す 「絵画的要素が強いものほど古い時代と考えられるかな」 「先ほど甲骨文で見た『馬』がどこかに隠れているね」 「『皇帝』を書いたけれど、あれは泰山刻石という古典だったね」 「竹が媒体のものは、よくみると竹の筋が見えるはずだね」 「石に刻されたものは拓本だね」 「瓦当は瓦のある部分に残されている」 スライド⑤小田原城 スライド⑥小田原城瓦当</p>
展開 II	<p>古代文字が、甲骨以外に何に残されていたかを考える 「青銅器」「石刻」 「木簡」「竹簡」「帛書」</p> <p>ワークシート③を切る ワークシート②の該当すると思うところに置いてみる</p> <p>絵画的な要素を考える</p> <p>甲骨文で見た「馬」を探す</p> <p>泰山刻石を臨書したことを想起する</p>	
展開 III	<p>媒体の特徴を考える</p> <p>採択実習を想起する 古代の建築物の瓦に文字が残されていることを知る</p> <p>瓦当を鑑賞する</p>	

	篆刻で正方形の空間に篆書の文字を収めたことを生かして、「衛」の文字を瓦当に見立てた円形の空間に収めることを知る 小篆と印章の「衛」の字例を参考に瓦当の空間に文字を入れる 瓦当資料を自分の書いたものを比較して考える 今日の学習活動を通して気付いたことや考えたことをまとめる	瓦当 ワークシート②後半 方形であっても円形であっても、篆書の基本構造は生かして書き込むように働きかける 瓦当資料 今日の古代文字に関する学習について振り返るように働きかける
終局	ワークシートを提出する 挨拶をする	ワークシートを提出するように促す 挨拶をする

【考察】

篆書と篆刻の学習のまとめとして文字の残された書写材料に着目して授業構想が練られていることが面白い。篆書の歴史、文字の姿態の変化を追いながら鑑賞を重ね、後半では簡単な表現活動を組み込むなど工夫されているが、少々詰め込みすぎではないかとの指摘もあった。

4. 4. 漢字の書 —墨跡—（書道Ⅲ）

【授業の要旨】

生徒は今までの書写、書道の学習の中で臨書を重ねてきた。しかし臨書ではどうしても「字形」に忠実に書こうとしがちで、書本来が持つ多様性を見失う危険性がある。そこで「墨跡」という、禅僧の精神性溢れる書を鑑賞することで、字形だけではない書の奥深さを生徒に味わってもらい、今後の書道学習のみならず生涯にわたり学ぶ上で、書への感性の向上を促そうというのが狙いである。

【資質・能力について】

育成したい「資質・能力」

芸術科書道では、書道の幅広い活動を通して、書に関する見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の文字や書、書の伝統と文化と幅広く関わる資質・能力が求められている。本授業では、墨跡という伝統、文化的背景を持ちながらも普段生徒が触れる機会の少ない書を扱うことにより、書に関する新しい見方・考え方を得ることができ、作品や書の伝統と文化の意味や価値を考え、書的美を味わい深く捉えることができるようになる。

育成したい「資質・能力」を評価する方法

ワークシートに継続的に記述した内容から、思考力・判断力・表現力等を、班別に発表の様子やそれを聞く姿から学びに向かう力を評価する。

本時案略案（小西・神戸作成）

	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
導入	挨拶をする 本時の授業準備	挨拶をする ワークシートを配布する
展開	「墨跡」について知る 「一休宗純」について知る 一休宗純の図版について直感的に鑑賞する 図版を見て感じたことをワークシートに書く 図版を見て感じたことを発表する	墨跡の本来の意味は墨で書かれた筆跡だが、それが転じて鎌倉、室町時代の日中禅僧の筆跡を指すようになったことを説明する 室町中期（1394～1481）の臨済宗禅僧一休咄（とんち）で生徒の興味を促す 一休の図版の内「尊林号偈」、「滴凍軒号偈」の2種類を、片方ずつ交互に1分程度生徒に見せる 些細なことでも構わないので気づいたことを書くように促す

	<p>(休憩10分) 一休宗純の図版から使用筆の質を探る</p> <p>使用筆の質の違いによる書効果の変化を知る 一休宗純の全体図版について、班別で分析的に鑑賞する</p> <p>鑑賞したことについて班ごとに発表する</p> <p>「尊林号偈」、「滴凍軒号偈」の共通点、対照点について知る</p> <p>墨跡の鑑賞学習を通して、書は巧拙以外にも精神性等の様々な要素があることを知る</p>	<p>生徒に、他の生徒の発表内容について感じたことを書くように促す</p> <p>「尊林号偈」、「滴凍軒号偈」のそれぞれ上部2文字「尊林」、「滴凍」を拡大して生徒に見せ、どのような筆で書いたのか考えるように促す</p> <p>生徒を前に集め、実際に硬い筆と柔らかい筆を使い書いてみせ、生徒の理解の深化を促す</p> <p>何班かに分け、「尊林号偈」、「滴凍軒号偈」(全体図版)の内、どちらか一方を生徒に配布する</p> <p>図版配布時に班発表を行うことを伝える</p> <p>班別話し合い中、必要に応じて鑑賞の切り口(例として「力強いか」「技巧的か」)を提供する</p> <p>どのように鑑賞したかという観点と、根拠となる理由について発表するよう生徒に促す</p> <p>班発表中に共通点、対照点について黒板に書く</p> <p>他班の発表について感じたことをワークシートに書くよう生徒に促す</p> <p>例として、「尊」の上部2点が雀の形に似ているが、これは「尊林」は一休が飼っていた雀が死んだ時の号であるから、等の逸話を説明し、生徒の理解深化を促す</p>
<p>終局</p>	<p>本時の学習活動を確認する 挨拶をする</p>	<p>本時の学習活動を確認するよう促す ワークシート回収し、挨拶をする</p>

【考察】

一休という生徒にも馴染みのある僧侶の書を教材としたためか、とても反応がいいように感じた。生徒の書の世界を広げていくには良い試みであったか考える。

4. 5. 鑑賞から表現へ ―書論から考える― (書道Ⅲ)

【授業の要旨】

生徒の文字環境の多くは活字に囲まれている。高等学校で書道の学習を重ね、古典に触れる機会を多く持った者でも、いざ創作となると活字に引きずられ均等、均質な表現に陥ってしまうことが多い。そこで、書論の一文を手掛かりにして、古人が書の表現において何を良しとし、何を嫌い、何を目指していたのかを知り、それを踏まえて自己の表現の幅を広げていくことを試みる。

【資質・能力について】

育成したい「資質・能力」

書論は、書に対して深い洞察力を持った人が深い思索に基づいて残した言葉が多い。その言葉と表現との関連を考え、書作に活かすことで書の芸術性を深く知ることができる。

育成したい「資質・能力」を評価する方法

書論に触れる前の作品と書論を学んだ後の作品を比較して考えたことを言語化し、パフォーマンス課題としての学習成果(作品)と合わせて評価する。

本時案略案（伊藤作成）

	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の創作作品を見る ・創作をするにあたり、先人の意見を尊重することの重要性を知る ・書論という形で様々な書に対する考え方が蓄積されていることを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の制作過程を想起するように促す ・主な書論について紹介する
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・画禅筆随筆の第二則の本文及び訓読が施された資料を読む ・「位置等勻」と「有収有放」に着目する ・「収」と「放」の意味を考える ・「収」と「放」は収束と発散の意味であることを知る ・「無左右並頭者」の意味を考える ・王献之の書である「廿九日帖」の図版を見る ・文字の位置が均等でないことを確認する ・董其昌の書を見る ・米芾の書を見る ・他の芸術の例を考える ・自己の書作に生かすには、どのような表現上の工夫が可能かを考える ・表現上の工夫を意識して書作を試みる ・考えた表現上の工夫が実現できているか相互評価を行う ・相互評価を踏まえてまとめ書きをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・書論に出てくる言葉の意味を考えながら読むように促す ・「収」と「放」を用いた熟語から連想するように働きかける ・「左右の頭が並ばない」というのは何が並ばないのかを考えるよう働きかける ・「収」と「放」、「無左右並頭者」が密接な関係を持っていることに気付くよう促す ・歴代に残る様々な書においても同様なものが観察されることを知るよう促す ・書論で学んだことを自己の制作に生かすよう働きかける ・自己で考え、相互評価で得たものを実現できるように集中してまとめ書きをするよう働きかける
終局	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の作品と比べてみる ・前時の作品と変化した部分をワークシートにまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の作品と本時の作品の相違を様々な観点から比較し、言語化してまとめるよう働きかける

【考察】

前時の作品と本時の作品を比較すると大きな相違を感じる事ができた。活字が最も美しいと考える生徒が一定数存在する現実は確かで、人間が自然に身体的運動を行うことで良いものができるということを感じられたのは成果だと考える。

（文責：荒井 一浩）

5. 研究を振り返って

本研究は、主として大学における教育実習の事前指導等において、学生が主体的に授業を構想したり、指導計画を工夫したりすることができるように参考となるテキストを作成し、これを通して有為な芸術科書道の教員養成に資することを目標としている。

平成30年3月改訂の高等学校学習指導要領による新しい教育課程は、平成34年度より学年進行での実施となる。来年度より移行期間となることもあり、本研究では、以下に示す改訂の趣旨や方向性を踏まえた実践例とその考察を通して、授業づくりの視点を明確に示すこととした。

・内容構成の改善

これまで、一体的に示されていた指導事項を、「表現」では「思考力、判断力、表現力等」、「知識」、「技能」に、「鑑賞」では、「思考力、判断力、表現力等」、「知識」に分けて示している。また、「共通事項」を「知識」として示し、「表現」及び「鑑賞」の学習活動において共通に働く資質・能力として位置付けている。

・「知識」及び「技能」に関する指導内容の明確化

「知識」については、作品を構想し工夫したり、味わって捉えたりする活動を通して理解され、汎用的なものとして身に付けられるものとしている。「技能」については、作品を構想し表現を工夫するために必要な技能とし、「思考力、判断力、表現力等」の育成と関わらせて習得できるようにすることを明確にしている。

・鑑賞の指導内容の充実

「作品の価値とその根拠」「書の現代的意義や普遍的価値」などについて考えたり、「表現効果や風趣」との関わりから書のよさや美しさについて理解したりすることを示している。

また、今回の改訂において、書に関する見方・考え方として「感性を働かせ、書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きに視点で捉え、書かれた言葉、歴史的背景、生活や社会、書文化などとの関わりから、意味や価値を見いだすこと」を示し、それを踏まえて新設された〔共通事項〕については、高等学校学習指導要領解説に「時間性と運動性」、「書の表現性」、「書を構成する要素」、「造形性と空間性」の四つの視点を示し、書独自の特質を明確にしている。

本研究では、これらの改善点を踏まえつつ、昨年度の実践例4件とあわせて、可能な限り、書道ⅠからⅢ、各領域・分野を網羅できるようにした。研究にあたっては、芸術科書道の各授業を通して育成を目指す資質・能力を明確化するとともに、主体的・対話的で深い学びを実現するための改善が図られるよう、授業計画を構想し工夫した。また、パフォーマンス課題としての作品制作、ルーブリック評価も随時取り入れ、生徒の学習の実現状況を適切に把握し、授業改善に資する視点も加えている。平成21年の学習指導要領では、「言語活動の充実」「基本的な知識・技能を習得し、それを活用した思考力・判断力・表現力等の育成」がうたわれ、芸術科書道においては、言葉を選定していく場面や鑑賞において作品を批評する活動において言語活動の充実を図り、生徒が主体的・対話的に学習を進めることが行われてきたところである。しかしながら、書の特質を踏まえた上で、生徒が「深い学び」を実現しているかという点については大きな課題が残っている。本研究では、表現や鑑賞の学習過程において、比較、分類、統合、結合、類推などの「思考の手立て」を活用しつつ「深い学び」につながるよう学習過程を工夫したことが特筆できる点である。また、「知識」や「技能」についても、思考・判断を通して身に付けられ、活用されるような授業展開を工夫している。

昨年度からの継続研究で実践例は合計9件となり、様々な視点からの授業改善の実例をある程度、提示することができたと考えている。今後、新学習指導要領で示された新たな視点を踏まえつつ、多角的な視点をもって実践を確実に広げていきたい。また、これまでの成果を整理・統合するとともに、有為な芸術科書道の教員養成に資する新たなテキスト作成へと展開し、学部や教職大学院の実践研究の場で活用し、検証を進めていくこととしたい。

(文責：加藤 泰弘)